



後、仕事の際もお互いに日本語で話したということである。また、台湾出身者は連合国人として取り扱われてないため、戦後出された「連合国人及び中立国人、無国籍人に対して食糧の特別配給制度」の対象外になり、「中華民国国民」という身分を入手しないと配給がもらえないという問題も抱えていた。そのため、当時、東京同学会と合併することについては、台湾留学生連盟のほうで急いでいた。これらの問題は両組織合併後もずっと絡まっていたようだ。「一言で言うとね、私は『戦後初期には、大陸出身の方でも、台湾留学生でも、迷迷糊糊（ミーミーフーフー 混沌）』としか言えない状態だった」

というのが郭氏の感慨であった。日本の敗戦当時、中国自体が従来の「政権」（日本統治下の台湾復帰、満州国、汪精衛政権などの傀儡政権の崩壊など）を大きく変動させることになり、それは日本にいた中国人華僑・留学生にとって大きな試練となって降りかかってきた。在日中国社会の変貌も戦後の外国人登録や戦勝国民特配などにより加速し始めた。その中で、知識人としての中国人留日学生の動態は、今日に至る日本と中国（中華人民共和国、中華民国）との関係の一つの原点として注目されるべきだと思う。

近・現代化に伴う中国杭州の食生活変化の断面

李 徳雨

（歴史民俗資料学研究所 博士後期課程）



2011年、非文字資料研究センターから嬉しいニュースが届いた。それは、私が派遣若手研究支援の一環として、派遣研究員となることを許可された通知書であった。韓国から日本に留学をしている私が、中国で3週間の派遣研究を行える事になったのである。2012年3月5日（月）から3月25日（日）まで、中国浙江省にある浙江工商大学の日本文化研究所に「近・現代化に伴う食生活変化の研究」というテーマで訪問することになり、王勇教授、陳先生など、現地の先生とチューターさんのお陰で、中国の食生活を体験し、調査することができた。

筆者は韓国・日本の食生活に関心を持っており、特に近代化以降、変化した食生活にフォーカスして研究している。今回、中国の事例は日韓の事例とは別の研究テーマとして、また東北アジアの一つの国として、日韓中の相互理解をするために、距離的には近いが異なる食文化であること、またその変化の研究を比較するために中国という国を選択した。

浙江工商大学は上海から車で2時間ぐらい離れた杭州という所にあるが、筆者が訪問した日本文化研究所は、さらに杭州市内から1時間ぐらい離れているところの下沙キャンパスにあった。杭州は南宋時代の首都で「西湖」と呼ばれる自然遺産があり、中国人が人生の最後に住んでみたいというような観光地でもあり、環境的に安定している場所である。また龍井村という中国最大の茶葉生産村があり、中国で唯一のお茶博物館がある。お茶

というのは単に食事の後の飲み物としてのものだけではなく、食生活の余裕を楽しめる嗜好飲食として、中国食文化の代表的な特徴であるといえる。また地域別に、味、栄養、香辛料などに差がある中国で、南に位置している杭州は、王様、貴族の料理から一般の庶民料理まで多彩な種類の料理があり、杭州の食文化の特徴であるといえる。特に杭州の名物として乞食鶏（Beggar's Chicken、叫化鸡）、東坡肉（东坡肉）、西湖の淡水魚料理などは、杭州食生活の特徴がよくみられる食べ物である。

今回の派遣研究を通じて得られた大きな収穫は、実際の中国人の家庭を訪問し、彼らの食生活を体験してみたことである。3月のある日、Aさんの家の夕食会に招待された。Aさんの家では、主に夫が料理を担当し、招待された8人ぐらいの友人たちと一緒に夕食を食べさせて貰った。中国の多くの食べ物を食べてみる機会でもあったが、それよりも彼らがどのように料理を準備し、どのような話をしながら食事をしているのかに非常に興味があったが、食卓では彼らの考えなども感じることができ、非常に意味がある席となった。

また 吳山広場（吳山广场）という所の小吃文化（^{シャオチー}屋台料理）は、日本、韓国とは違う庶民の食生活をのぞくことができた機会であった。びっしりと並んでいる屋台のような店で様々な食べ物を選んで真ん中のテーブルで食べている人々、また日本や韓国では簡単には食べることができない様々な食材で調理された料理を観察した。

彼らはなぜ屋台で食べているの
 だろうかという疑問があったの
 で、数時間ここに滞在し、彼ら
 と一緒に食べてみて、彼らの表
 情を見て、話を聞いてみた。ほ
 とんどの人の反応は、低価格で
 あること、そして簡単な食事と
 しては味がいいとのことだっ
 た。一方で小吃料理から出た生



呉山広場の小吃文化

ごみを処理するのに奔走している姿も見えた。全部食べ
 ることなく、少し残していた姿が多く見られたが、これ
 は中国人が料理を消費する1つの習慣を確認することが
 できる機会になった。近現代化以降の食生活は、急激
 に変化しながら、世界的に生ごみ処理の問題が発生し、
 生ゴミをどのように処分するかの問題で悩んでいる。そ
 して消費意識の教育、社会運動など、さまざまな角度か
 ら改善点が要求されている。このような問題は中国も同
 じ状況にある。お客を招待して食事を持って成す際には、

お客が食べ残すくらいの
 量の食事を提供すること
 がマナーとして知られて
 いる中国では元より生ご
 みに関して寛大な印象が
 あった。



家庭食

中国杭州における食生
 活の変化はどこでも簡単に見ることができる。お茶中心
 の飲料文化は路上でテイクアウトのコーヒー文化にとっ
 て変わられ、和食、韓食などの多国籍料理店などではそ
 のような変化像がよくみられる。近現代化以降、文化開
 放され、フランチャイズ店やファストフード店の登場で
 多様化する食生活の中に共存する彼らの伝統文化、また
 多くの人口が消費する食糧とそれに伴う生ごみが社会的
 問題化されていること、このような風景が中国における
 食生活の変化の一断面を見せてくれる一例として、今後
 の食生活の研究において多くの示唆を残してくれた派遣
 研究であった。

カナダの多元文化及び日系人の移民



于 洋

(歴史民俗資料学研究所 博士後期課程)

2012年3月8日から非文字資料研究センターの若手
 派遣研究者としてカナダのブリティッシュコロンビア大
 学アジア学科を訪問し、バンクーバーとスティヴストン
 への調査をする機会を頂いた。今回カナダの多元文化と
 民俗、特に、移民文化を体験した。さらに、和歌山県の
 漁民がスティヴストンへ移民した歴史に注目し、地元伝
 統文化と外来の異文化との融合の現状を探ることにし
 た。

1 カナダ文化と民俗

カナダには多種類の民族がいるため、多種文化を持つ
 国である。原住民を除くと、ほかの人たちはすべて外来
 移民であるため、移民の国と言われる。政府は移民に自
 分の文化、伝統と言語を維持させたため、この多元文化
 はうまく発展した。1945年以来、アジアの日本や中国
 などの国からの移民もカナダの多元文化に深く影響を与
 えてきた。

カナダの民俗は原住民の民俗伝統とインディアンとエ

スキモー、そしてフランスとイギリスの侵入民族の伝統
 という2つの要素を含んでいる。2つの民俗は別々に発
 展するが、ある程度相互に影響する。このような民俗研
 究の大部分はインディアン、エスキモー、フランス系カ
 ナダ人の民話を記録してなされ、残りは英語とゲール語
 の民間伝承の分野に及んでいる。カナダの主要な集団の
 伝統を反映したものは、1. 先住民（ネイティブインディ
 アン、イヌイト）、2. フランス語（カナダ）、3. アング
 ロ・カナダ（英語、アイルランド語、スコットランド、
 ウェールズ）、4. ほかの民族グループの4つの種類の民
 話を含んでいる。20世紀後半以降、カナダの民間伝承は、
 世界中の70以上の異なった伝統にそのルーツを持って
 いる。

バンクーバーは北アメリカ第3番目の海港都市であ
 る。日系と中国系の移民もあり、地元の伝統文化は日本
 文化と中国文化のような外来の異文化を融合している。
 例えば市中心のチャイナタウンはカナダの多元文化の代
 表的な要素と考えられる。チャイナタウンは、様々な世